



TITLE:

# 腎細胞癌との術前鑑別診断が困難であった転移性腎腫瘍の1例

AUTHOR(S):

玉田, 聡; 川嶋, 秀紀; 仲谷, 達也; 長谷, 太郎; 韓, 榮新;  
山本, 啓介; 岸本, 武利

---

CITATION:

玉田, 聡 ...[et al]. 腎細胞癌との術前鑑別診断が困難であった転移性腎腫瘍の1例. 泌尿器科紀要 1998, 44(7): 489-492

ISSUE DATE:

1998-07

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/116217>

RIGHT:

## 腎細胞癌との術前鑑別診断が困難であった 転移性腎腫瘍の1例

大阪市立大学医学部泌尿器科学教室 (主任: 岸本武利教授)

玉田 聡\*, 川嶋 秀紀, 仲谷 達也, 長谷 太郎

韓 榮新, 山本 啓介, 岸本 武利

### A CASE OF METASTATIC RENAL TUMOR ORIGINATING FROM LUNG CANCER DIFFICULT TO DISTINGUISH FROM RENAL CELL CARCINOMA

Satoshi TAMADA, Hidenori KAWASHIMA, Tatsuya NAKATANI, Taro HASE,

Young-Sin HAN, Keisuke YAMAMOTO and Taketoshi KISHIMOTO

*From the Department of Urology, Osaka City University Medical School*

A 66-year-old female underwent left lower lobectomy for her lung cancer (adenocarcinoma) in November 1992, followed by the resection of brain metastasis in October 1993. Later, a left renal tumor with paraaortic lymph node swelling was found by a follow-up abdominal CT. She was treated with left nephrectomy and the resection of the paraaortic lymph nodes in June 1997.

The histopathology of the resected tumor and the lymph nodes revealed a metastatic renal tumor originating from the pulmonary adenocarcinoma. There have been 38 reported cases of metastatic renal tumor from lung cancer in the Japanese literature.

(Acta Urol. Jpn. 44: 489-492, 1998)

**Key words:** Metastatic renal tumor, Pulmonary adenocarcinoma

#### 緒 言

腎は、肝、肺、骨、および副腎について転移を受けやすい臓器であり<sup>1)</sup>、剖検例では全悪性腫瘍の約1.8~18.7%に腎転移が存在する<sup>2-5)</sup>と報告されているが、転移性腎腫瘍が患者の生存中に診断されることは比較的稀である。今回われわれは、腎細胞癌との術前鑑別診断が困難であった肺腺癌の腎転移症例に対し、根治的腎摘除術を施行したので若干の文献の考察を加えて報告する。

#### 症 例

患者: 66歳, 女性

主訴: 左腎腫瘍精査

家族歴: 特記すべきことなし

既往歴: 1992年11月12日左肺癌にて当院第2外科で左肺下葉切除術を施行されている。病理組織学的診断は腺癌 (pT<sub>2</sub>, N<sub>0</sub>, M<sub>0</sub>) であった。1993年10月27日、脳腫瘍の診断のもとに腫瘍摘出術が施行されている。病理組織学的には肺腺癌の脳転移と診断された。

現病歴: 1997年5月16日、当院第2外科での経過観察中の腹部CTにおいて左腎の腫瘍性病変および傍

大動脈リンパ節の腫大を認めたため1997年6月6日当科入院となった。

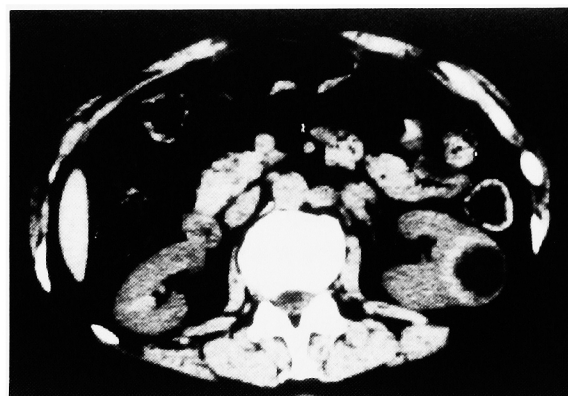
入院時現症: 体格、栄養とも中等度。左腋窩部に肺癌による手術痕が認められたが、腹部所見では特に異常を認めなかった。

入院時検査所見: 末梢血、血液生化学、検尿に特に異常は認めなかった。血沈は 80 mm/hr と亢進していた。

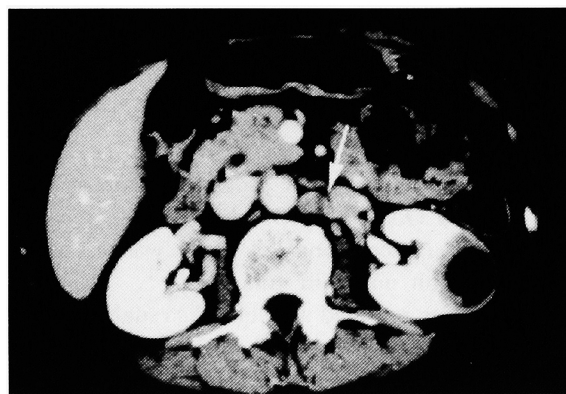
画像所見: 胸部X線写真では左下肺野にスリガラス状の陰影を認めた。その他の肺野に転移を疑わせる所見は認められなかった。IVPでは左腎中部に外側に突出する腎陰影不整を認めた。plain CTでは同部位に一致して内部がhomogeneousでlow densityな径3 cm大の腫瘍陰影を認め、enhanced CTにおいては周辺部がenhanceされた。また傍大動脈リンパ節も径3 cm大に腫大していた (Fig. 1)。骨シンチ、Gaシンチではその他の全身に転移を思わせる所見は認められなかった。

入院後の臨床経過: 肺癌の手術より4年6カ月経過していたことと、enhanced CTにおいて腫瘍陰影がenhanceを受けたことにより腎細胞癌の可能性を否定できず、腎細胞癌もしくは転移性腎腫瘍の診断のもと1997年6月16日腰部斜切開にて根治的腎摘除術および傍大動脈リンパ節郭清術を施行した。

\* 現: 和泉市立病院泌尿器科



A



B

Fig. 1. (A) An abdominal plain CT scan shows a low density mass in the left kidney. (B) An abdominal enhanced CT scan shows the same lesion in the left kidney is enhanced, and paraaortic lymph nodes are swollen (⇐).

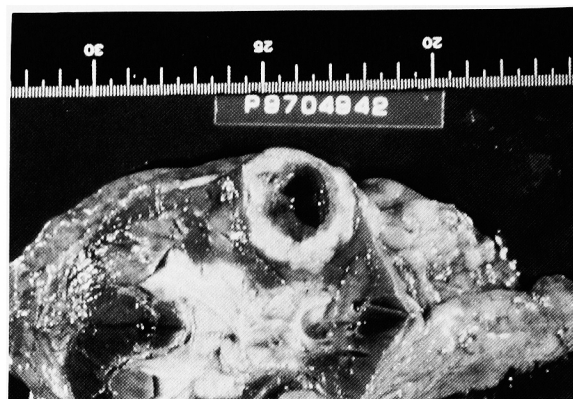
腫瘍は腎に限局しており周囲との癒着もなく腎外への浸潤も見られなかった。傍大動脈リンパ節は、腎門部下方大動脈に沿って2個が腫大していた。リンパ節の周囲との癒着もなかった。摘出標本の肉眼的所見では腫瘍の大きさは $3.0 \times 3.0 \times 3.0$  cmであり剖面は内部壊死を伴った囊胞様の淡黄色の腫瘍で内部の壁は不整であった (Fig. 2A)。

病理組織所見では原発巣の肺腺癌の像とよく似ており (Fig. 2B, C), アルシアンブルー染色において原発巣と同じく青く染まる粘液を産生する細胞が認められたため肺腺癌の腎転移と診断した。同様にリンパ節も肺腺癌の転移と診断した。

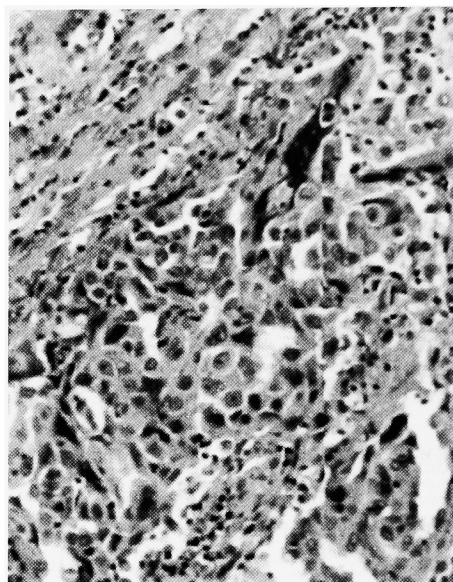
術後経過は良好で1997年7月1日退院した。術後9カ月を経過した現在、外来にて経過観察中である。

## 考 察

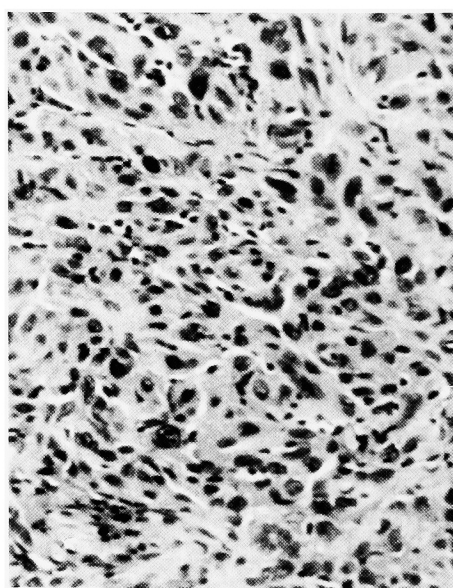
悪性腫瘍の腎転移が剖検時に見つかる場合は比較的多く Wagle ら<sup>2)</sup>によると1.8%, Klingler<sup>3)</sup>によると2.4%, Mayer<sup>4)</sup>によると7.7%, 森ら<sup>5)</sup>によると18.7%と報告されている。腎転移の原発巣は Mayer<sup>4)</sup>の報告によると肺癌 (27%), 乳癌 (14%), 胃癌 (12%)



A



B



C

Fig. 2. (A) Gross appearance of the resected kidney. (B) A microscopic finding of the lung adenocarcinoma. (C) A microscopic finding of the left renal tumor shows adenocarcinoma, which is similar to the histopathology of the lung cancer.

Table 1. Summary of 38 cases of metastatic renal tumor originating from lung cancer in the Japanese literature

Sex	male: female=7:2
Age	33-81 (mean 61.25)
Symptom	hematuria 21/38 (55.3%) abdominal pain 9/38 abdominal mass 6/38 pyrexia 4/38 back pain 1/38 body weight loss 1/38
Pathology	squamous cell carcinoma 20/35 (57.1%) adenocarcinoma 10/35 (28.6%) undifferentiated carcinomas 5/35
Therapy	total nephrectomy 23/35 (65.7%) chemotherapy 5/35 embolization 1/35 partial nephrectomy 1/35 no treatment 5/35

の順であったとされている。しかし、生存中に腎転移が診断される症例は多くない。これは腎への転移は血行性転移が多く糸球体毛細血管が腫瘍塞栓によって閉塞されるために腎盂、腎杯への浸潤が遅く、血尿などの臨床症状が遅れることに起因していると考えられている<sup>6)</sup> 生前診断例の場合、原発巣は肺癌が剖検例と同様に最も多く、子宮、食道、甲状腺がこれにつづく<sup>7)</sup> このように原発巣が肺癌に多い理由として肺の癌細胞が血行性に肺静脈、左心系を経て大循環系に散布され、それが腎において転移巣を形成しやすいためと考えられている<sup>8)</sup>

さて、肺癌の腎転移に限局してみると今回われわれが経験した症例は梶川ら<sup>9)</sup>の集計をもとに以後の報告例を加えると38例目にあたる<sup>10-16)</sup> Table 1にそれらのまとめを示す。主訴は血尿が38例中21例を占め肺癌術後の定期的な尿検査の必要性が示唆される。肺癌治療後腎転移発見までの期間は腎転移が先行した2例、不明の3例を除くと33例中27例が2年以内であった。しかし、自験例は4年6カ月後の再発であり7年後、9年後という症例もみられるため、比較的長期にわたって経過を観察する必要があると思われる。転移性腎腫瘍の診断におけるX線学的所見の特徴であるが、IVPでは腎細胞癌と同様に占拠性病変を疑わせる腎盂腎杯の変形や腎陰影の不整がみられることがある。CTの所見は、plain CTでは内部が不均一なlow density areaとして認められるが、enhanced CTではその造影効果は非常に弱いことが多い<sup>17)</sup> しかし自験例では造影効果がみられ、術前に腎細胞癌と鑑別することは困難であった。治療は不明の3例を除き35例中22例に根治的腎摘除術が施行されている。根治的腎摘除術の適応としては(1)腎単独の転移である場合(2)腎転移による症状が強い場合とされてい

る<sup>18)</sup> 自験例は傍大動脈リンパ節転移が認められたが腎と傍大動脈リンパ節に限局しており、腎細胞癌との鑑別が術前には困難であったので根治的腎摘除術を施行した。転移性腎腫瘍に対して根治的腎摘除術を行った場合の予後は前田ら<sup>19)</sup>によると1年生存率は43.9%、2年生存率は32.9%である。手術可能な腎細胞癌に比して当然ながら予後は不良であるが、本症例は幸いにも根治的腎摘除術後9カ月経過した現在でも他臓器への転移を認めていない。

以上、肺腺癌術後4年6カ月経過して左腎および傍大動脈リンパ節に限局した転移巣が発見された転移性腎腫瘍の1例を報告した。原発巣の肺癌治療後4年6カ月の転移であること、左腎および傍大動脈リンパ節に限局していたことの2点が本症例では興味のあるところである。われわれ泌尿器科医にとって腎腫瘍は日常的な疾患であるが、術前鑑別診断の際には既往歴にも十分な注意をする必要があると思われる。

## 結 語

66歳女性で肺腺癌の術後4年6カ月に発見された転移性腎腫瘍に対して根治的腎摘除術を施行した1例を経験したので、若干の文献的考察を加えて報告した。

本論文の要旨は、第160回日本泌尿器科学会関西地方会において報告した。

## 文 献

- 1) Abrams HL, Spiro R and Goldstein N: Metastases in carcinoma: analysis of 1,000 autopsied cases. *Cancer* **3**: 74-85, 1950
- 2) Wagle DG, Moore RH and Murphy GP: Secondary carcinomas of the kidney. *J Urol* **114**: 30-32, 1975
- 3) Klinger ME: Secondary tumors of the genitourinary tract. *J Urol* **65**: 144-153, 1951
- 4) Mayer RJ: Infiltrative and metastatic disease of the kidney. *Cancer and the Kidney*. 1st ed., pp 707-717, Lea and Sediger, Philadelphia, 1982
- 5) 森 亘, 足立山夫, 岡辺治男, ほか: 悪性腫瘍剖検755例の解析—その転移に関する統計的研究—. *癌の臨* **9**: 351-374, 1963
- 6) Zincke H and Furlow WL: Metastatic squamous cell epithelioma of the kidney: report of a cases of bilateral involvement and review of the literature. *J Urol* **109**: 971-973, 1973
- 7) 藤本清秀, 大園誠一郎, 岡本新司, ほか: 転移性腎腫瘍の1例—本邦報告74例の考察—. *泌尿紀要* **36**: 581-585, 1990
- 8) 大家基嗣, 山本 正: 肺癌腎転移の1例. *臨泌* **45**: 864-866, 1991
- 9) 梶川恒雄, 藤岡知昭, 久保 隆, ほか: 肺癌腎転移の1例. *西日泌尿* **56**: 1029-1032, 1994
- 10) 高橋 浩, 高橋 剛, 平野昭彦, ほか: 腎盂腫瘍



- を思わせた肺未分化癌腎転移の1例. 西日泌尿 **55** : 1709-1711, 1993
- 11) 林 豊秀, 山内大司, 萱島恒善, ほか: 肺癌からの転移性腎腫瘍の1例. 西日泌尿 **56** : 889-891, 1994
- 12) 篠島弘和, 森田 研, 榊原尚行, ほか: 肺癌腎転移の1例. 臨泌 **49** : 483-485, 1995
- 13) 竹治 励, 黒岡信幸, 澤田葉子: 転移性腎腫瘍の1例. 日独医報 **39** : 104, 1994
- 14) 太田智則, 塚本 定, 石川 悟, ほか: 7年後に孤立性腎転移を認めた肺癌の1例. 泌尿器外科 **8** : 487-489, 1995
- 15) 永富 裕, 東 直隆, 古屋 徹, ほか: 肺癌の腎転移の1例. 泌尿器外科 **9** : 1130, 1996
- 16) 鈴木康友, 堀内和孝, 木村 剛, ほか: 腎細胞癌と鑑別困難であった肺癌腎転移. 臨泌 **51** : 853-855, 1997
- 17) Bhatt GM, Bernardino ME and Graham SD Jr: CT diagnosis of renal metastases. J Comput Assist Tomogr **7** : 1032-1034, 1983
- 18) 寺田為義, 熊谷信夫, 笠井妥陵, ほか: 肺癌腎転移の1例. 臨泌 **41** : 779-781, 1987
- 19) 前田 修, 亀岡 博, 三好 進, ほか: 転移性腎腫瘍の3例—本邦報告38例を含む136例の統計的考察—. 泌尿紀要 **33** : 572-578, 1987

(Received on January 19, 1998)

(Accepted on April 21, 1998)